

「モダンガール」という言説空間

申 河 慶

はじめに

「モダンガール」とは、関東大震災の後、顕著に現れはじめた西洋風のファッションや断髪をした女性を指して、大正から昭和に変わる時期に新聞や雑誌などで大きく取り上げられた流行語である。そして、このような風俗の流行の背景に、当時急速に発達した大衆雑誌や新聞、映画などのマス・メディアが媒介することによって、「モダンガール」は昭和モダニズムの精華として目されてきた。

このような「モダンガール」に関する研究の一つに、鈴木貞美の『モダン都市の表現』がある。そのなかの「第三章、モダンガール、そして小説の中の彼女たち」で、鈴木は、明治・大正から昭和にかけての小説に表れる「モダンガール」像を、都市空間の変貌や女性の社会的位置の変化とそれをめぐる思想的な流れとを交錯させることで考察している。つまり、「モダンガール」は、一方でアメリカ映画の主人公の軽薄なマネに過ぎなかったという側面を指摘しながらも、洋装・断髪がもつ、日本の伝統的な文化秩序にとらわれない反抗性をもったことを認め、さらにその「モダンガール」が大正から昭和初期にかけての前期大衆消費社会を基盤とする、時代の感覚を表す存在として積極的な意味を与えている。このような「モダンガール」に関する評価は、八〇年代以後活発に研究されはじめた都市論・身体論による成果の典型的な一例だといえよう。

しかし、個人としての作者とその作品を説明することは、つまりは個人の認識する「モダンガール」像にとどまるのであって、それを集積したからといって、果たして、大衆消費社会に「大衆」として登場した「モダンガール」の意義が説

明しきれぬだろうか。言い換えれば、個人史の集積が大衆史の説明にもなりうるのだろうかという疑問が残る。

この疑問は、鈴木が「モダンガール」を基本的に風俗文化の主体としてとらえることからもたらされたと思われる。「モダンガール」は主体に見えてはいても、当時の知識人の「モダンガール」をめぐる言説は、実は「モダンガール」が主体などではなく、客体とみなすべき存在であることを教えてくれる。そこで、本稿では、知識人によってとらえられる「モダンガール」のイメージを、大衆の代弁_{II}表象 (representation) のプロセスとして認識する。このような研究の一つに、バーバラ・ハミル・佐藤の「モダンガールの登場と知識人」¹⁾を挙げることができる。佐藤はそのなかで、当時の雑誌に載った記事の論調の多くが、「現実のモダンガール」と「理想のモダンガール」を区別していた、という注目すべき指摘をしている。それは、当時の知識人が各々の立場から、アメリカ映画の模倣として現れた「現実のモダンガール」に対して、「現代の女性」という意味をもつ「モダンガール」はどうか「あるべき」かを論じていたことについての指摘である。

このような分析は、「モダンガール」をめぐる言及が、当時盛んであった婦人問題に関する論争と連動していたことをも示唆する。女性の職業進出や参政権問題などの、様々な男女間、階級間の先鋭に対立する利害関係の表現が、何らかの形で、「モダンガール」と結びついて論じられていたことを意味しよう。ミリアム・シルババークは、女給の社会的位置を考察した論文のなかで、「モダンガール」と女給を比べて次のように論じている。

女給は、通念となつた性・文化・政治的慣習に手を染め、またそれに翻弄された歴史上の実在像として、イデオロギー上の構成概念としての「モガ」と対比して考察する対象だ……。それは、前にも述べたように、「中産階級の消費主義の体現」としてなどよりも、文化・イデオロギー的な構成概念としてのほうが重要であるからだ。²⁾

本論はこのような認識を肯定する。なぜならば、この主張は稿者のいう「モダンガール」を主体ととらえるのではなく、知識人による客体としての「文化・イデオロギー的な構成概念」であるともみなしているからだ。したがって、本稿では「モダンガール」を華々しい昭和モダニズムの主體的な体現者としてとらえるよりも、「モダンガール」を代弁_{II}表象される大衆としてとらえ、その「モダンガール」をめぐる言説がどのように発生し、いかにして同時代の他の文化思潮との相関関係において多様な複合的な意味づけがなされていったのかを追跡したい。このように「モダンガール」に関する知

識人の言説を一つの言説空間ととらえ、そのなかで、出版ジャーナリズム、多様な知識人、支配階層などの複数のイデオロギーがいかにかせめぎ合っていたかを示すのが本論の目的である。

創りあげられる「モダンガール」像

「モダンガール」という言葉は、主に断髪・洋装という外形からとらえられる、それまでにはない女性を指して、昭和元年ぐらゐから新聞雑誌で大きく取り上げられることよって流行りはじめた用語であることはすでに指摘した。この「モダンガール」に関する同時代の論調に一通り目を通してみると、まず、ある疑問が指摘されていることが注意される。「考現学」を提唱した今和次郎は次のように表現している。

女の和服と洋服の割合は、……洋服は全体の約一パーセントです。統計に出たこの数字にきつと誰でも疑ひをもたれること、思ひますが、幾度くりかへして見ても同じ関係に出ます。この事は、われ／＼の目に付きやすいものは多数に感ぜられるのだ……と云ふことを教へてくれるやうなんです。従つてわれ／＼の印象と云ふもので事実を判断する。ととんでもないまちがひが起る、と云ふ事を氣付かせるのです。兎に角一九二五年初夏の銀座街では、女の洋装は、和服九十九に対して一の割合に過ぎないのです。

社会現象としてもはやされるようになった「モダンガール」は実際どれぐらい存在したのかという、このような素朴な疑問を抱いたのは今和次郎ただ一人の問題ではなかっただろう。しかし、「モダンガール」が活歩するとされる銀座で実際その数を数えてみたら案外少なかったという、今和次郎のこの記述から注目したい点は、「モダンガール」の実際の数の少なさよりもむしろ「案外」のほうである。今和次郎の同時代の人々はなぜそれほどまでに断髪・洋服の女性に敏感に反応したのか、そして、そのような女性の急増という社会的認識はいかにして広まっていったのか。

「なぜ」は後で論じるとして、ここではまず、「いかにして」の問題から考えてみよう。次の記述はこれに対する示唆を与えてくれる。

去年、このモダン・ガールの騒ぎの全盛時代頃に、僕の田舎の友人は久し振りに上京して来て、『モダン・ガールといふものを見せてくれ』とせがんだ。兎に角、本場だといふ銀座へ行つて見て、その更に本場だといはれてゐる喫茶店へも一二軒行つて見たが、小説や雑誌できまつてゐる型をしたのには一人も会へなかつた。そして彼は非常な失望をして帰つた。今でも銀座の四角に立つて、そのお定りの外形だけでもモダンな女が何人通るか氣をつけて見るが、恐らく千人の通行人中に一人は居まい。

「モダン・ガール」の数に関して多少の誇張の混ざつたこの記述は、モダニズム系雑誌『女性』に発表された鈴木文史朗という新聞記者の記事であるが、ここからわかることは、「モダン・ガール」というのは地方から物珍しさゆえに見物に来るほどの都市の先端の流行風俗であり、そのような流行風俗の発信・流通において雑誌などのメディアが大きく機能していたことを示してくれるということである。

しかし、新聞雑誌などを賑わしていたそれらの「モダン・ガール」に関する情報の拡散には、少なからず異常さを感じずにはいられない。実際に都市の繁華街に徘徊する「モダン・ガール」の数は社会的に認知（あるいは期待）されていたよりずっと少数であつたにもかかわらず、「モダン・ガール」の特徴は定型化された表現によつて語られ、その命名者が誰であるかさえもが問題になるほどの関心を集めている。

これに関し、上記の同じ記事のなかで、鈴木文史朗は、「嘘も十辺いへばほんたうになる。大量生産で知られて来てゐる軽薄な新聞雑誌による『モダン・ガール』のわめきは、遂にそれが立派に東京の真中に実在してゐるかの感を日本中に与へて了つた」といつて、急激に成長していた新聞雑誌などのマス・メディアによる煽情性を強調している。もちろん、円本ブームの真つ只中で「ネタ探し」に狂奔するマス・メディアに「モダン・ガール」は格好の素材を提供したことはいうまでもない。

しかし、それよりもつと注目すべき点は、「モダン・ガール」に関する論調が多くの場合、決まつた言説の枠組みをとつている点にある。つまり、洋装・断髪女性の登場を前提にして、その社会的な基盤や意義を問ひ、流行に従う軽薄な実際の「モダン・ガール」をけなし、それに対して各々の思う本当の「モダン・ガール」を提示する、という言説の構造であ

る。このような論調は「モダンガール」の出現・流行化とどのような関係にあるのか。結論からいうと、当時の知識層はマス・メディアの文化的オピニオンの形成力を認め、その上でのオピニオン・リーダーとしての自らの力を自覚していた、ということである。次の久米正雄の発言はこの事実を裏つけてくれる。

これ（注：北沢秀一）が名付け親で、それを宣伝——つまり広めた、広めたといってもなんですが、種々流布させたものが新居格君、清沢瀏君その他種々ありますが、今や一般の言葉になった。

今のわれわれに「モダンガール」に関する資料として残されたこれらの記事群は、当然のことながら、実際の「モダンガール」像を伝えてくれない。それらの記事が教えてくれるのは、むしろ、そのような論調を生産した知識層の「モダンガール」に対する認識の枠組みであろう。そのことを本論は「モダンガール」が客体であり、それを対象に文化現象として位置づけた主体はマス・メディアを媒介にした知識層の言説にあると主張してきたわけである。

「モダン」の意味したもの

「モダンガール」という言葉は、新しい時代を先取りした女性の登場という意味から、やがて、ダンスやジャズに酔いしれ、ハリウッド映画の女主人公の服装からポーズまで真似する「銀座や丸ビルのショーウィンドウを覗き歩く流行奴隷」という軽蔑を含んだ名称に変わっていく。このような意味変換の過程において、知識人が果たした役割は前節で示したことでもうかがわれるのだが、しかし、そもそも「なぜ」そのような断髪・洋装の女性の登場に敏感に反応し、その動向に注目していたかについてはもっと詳しく考察する必要がある。

バーバラ・ハミル・佐藤は前掲の論文のなかでその理由に触れている。それによると、当時の知識層は「理想としてのモダンガール」と流行風俗に走る「現実のモダンガール」を区別したとし、次のように述べている。

このように評価の低い現実のモダンガールとは別に、理念化したモダンガールにたえず言及するのは、「モダンガール

ル」という言葉そのものもつイメージに影響されていたためと考えられる。「モダン」、あるいは日本語での「近代」という語には、このころから既に特別な意味合いをもたせようという共通の認識が知識人にあった。それは進歩的、合理的であり、伝統的なものとは決定的に対立するものであると位置付けられていたのである。

つまり、「モダン」という語を、進歩的、合理的、反伝統的という意味で認識し、したがってその語に正の価値を付与していた知識層が、流行風俗に走る実際の「モダンガール」に対して軽蔑と失望を表現したのが、結局「モダンガール」に両義的な評価を生んだというのである。このように、「モダンガール」に関する言説が両義性をもたざるをえなかつたということが、知識層の「モダン」に関する狭義的認識から来しているという指摘は、この論文の価値として認めなければならない。

しかし、なぜ流行風俗としての「モダンガール」は、「モダン」、つまり、進歩的、合理的、反伝統的ではないのだろうか。この疑問に答えるためには、当時の「モダン」という語が意味したものについてもっと詳しく検討する必要があるだろう。つまり、どのような要素が、進歩的、合理的、反伝統的な意味として受け容れられていたかを明らかにする必要があるのだ。

昭和五年、文芸春秋社から創刊された『モダン日本』の創刊号に載った、「1 謳歌すべきモダン諸相／2 排撃すべきモダン諸相」というテーマをめぐる各界二三名のアンケート記事は当時における「モダン」の意味について重要な示唆を与えてくれる。

☆新居格

1. 理智性―科学性、こゝから来る断截性。

感情の曇りのうすらぎと、余剰の感傷のなきがためにです。理智性がいろんなものを鮮明に映す故に。

2. 排撃すべきは流俗モダンです。形態の模擬だけあって、精神若くは内容の角度なきものがそれです。流俗モダンの横行をかなしむ。

☆青野季吉

一般的に言つて、モダンな現象で結構ですが、それがモダンデカタンになると排撃に値します。

(例1) A女子の服装の単純化・活動化―洋服は結構です。

Bが、露出主義が中心になればデカタンです。

(例2) Aマルクス主義的实践は最もモダンです。

Bが、サロン・マルクシストや例のフアンはデカタンです。

この他にも、井伏鱒二、千葉亀雄、龍胆寺雄、北村小松などの人々が各々の「モダン相」について語っている。もちろん、彼らの言及を一概に要約するのは無理である。そのなかには「理由など書かない方が、むしろモダンです。理屈は暑うございます。理由をいはないと盲断かも知れませんが、暑いから勘弁して下さい」など、編集者の質問意向を意図的にずらす返答も見られるし、多様な立場からの様々な「相」についての言及が載っているからである。しかし、そこから「モダン」についての一定の概念的傾向が読み取れる。すなわち、女性の身体・服装などの西洋化、ラジオ、レコード、映画、ジャズなどの機械文明の発達をもたらした軽さ・スピード感などを「モダン相」として認めつつ、これらが表している新しい時代感覚を賛成の理由としており、一方、それが頹廢的傾向を示す場合、反対の理由としている、ということである。このような傾向を析出した上であらためて引用文に注目すると、両者ともに流行風俗としての「モダン」に反対していることはいうまでもないことだが、しかし、新居格が「科学性」を、そして青野季吉が「マルクス主義的实践」をそれぞれ「モダン」の概念と結びつけていることに注目すべきだろう。これらの言葉の結びつきをさらに明らかにするために、関東大震災の前後、すなわち大正末期から昭和初期にかけての科学史を参照する必要がある。

大正末期、総合雑誌『太陽』では、三回にわたって「科学」の特集が組まれている。大正一三年六月の「最新保険之研究」、一四年一月の「最新科学発明界の進歩」、一四年四月の「無線電話号」がそれである。X光線の治療、飛行機の発達、ラジオ放送などが目立つ。その他にも、アインシュタインの写真掲載(大正一一年六月)や鬱病の研究(大正一一年八月)など、これほどまでの研究がその短い間に集中して現れるとは思われにくい。研究内容が紹介されている。つまり、この時期は、医学をはじめ、生物学、化学、物理学、心理学などの諸科学が大衆の強い関心を集めており、また、地下鉄の開通や自動車の普及、ラジオ放送の開始(大正一四年)、映画の隆盛など、次々と現実のものになってくる科学の産物

によって、科学に対する大衆の関心は高まっていく一方の時代であったといえよう。

このような科学に寄せた知識人の関心と期待はどのようなものだったのか、そしてそれはいかなるレトリックで表現されていたのか。モダニズム文学の寵児としてもてはやされていた龍胆寺雄の次のような断言はこの問いに端的に答えてくれる。

社会はその進化に役立たないあらゆる存在を棄却してゆく。文学もまた然り。従って、モダニズム文学の健康な発達は、これによって形成されたモダンなる風俗が科学的に合理性があり、即ち、社会の進化にかなった健康なものではなければならない。これはモダニズム文学者自身の健康な社会認識に俟つほかない。これはなにによるべきか？
こゝに科学が決定的資格をもって登場して来ることになる。

つまり、ここから明らかになるように、「モダン」という概念が合理的で進歩的な意味合いと結びつくのは、それが科学的な認識に基づいているからだ、というのが知識人たちを支配した論理だった。それは龍胆寺雄の主張がこの「モダン」の概念を根拠にして、モダニズム文学はエロ・グロ・ナンセンスとあいまって文化の頹廢を助長するだけの退行的な文学である、という批判に対する答えであることを念頭におけばさらに明らかになるだろう。そして、「モダン」な風俗は、明るくて、健康的な生活につながるものでなければならぬ、という認識は龍胆寺雄個人の認識であるというより、上記の新居格を含む当時の知識層の支配的な認識であったというほうがより正しいだろう。

青野季吉の「マルクス主義的実践」が「モダン」であるという認識も、上記のような文脈において理解できる。「デカタン」とは、頹廢、退行を意味し、進歩・進化とは反対の意味合いとして使われていた。したがって、プロレタリア革命が「モダン」と結びつくのは人類の歴史的発展過程において必然的なものであるという認識を導きだす。つまり、プロレタリア革命こそ人類の進歩・進化という考え方に合致するものであるという信念をもっていったことは容易に理解できる。このように考えると、なぜ当時の知識層においてマルキシズムが容易に流行思想として広まることのできたかもわかってくる。マルキシズムは「モダン」な社会科学の一種として認識され迎え入れられたのである。当時であって「モダン」は科学信仰と結びついてさまざまな文化・文明の価値を決定づける根拠、その意味でより高次の価値とみなされていたと判

断していいだろう。

「モダン」という用語に寄せた知識人の科学的指向はさらに詳しく検討する必要があるがいまはここまでの指摘にとどめて、次にはこれを文学史的意味合いで検討したい。

大正末期、文壇の関心事が「個」から「社会」へとシフトしたことは周知のとおりである。つまり、自然主義文学を筆頭とする既成文学が、「個」から派生する概念である、自我、天才、芸術至上主義などを主張したのに対し、プロレタリア派や新感覚派などの新文芸勢力は「社会」へ目を向ける必要性を主張したのだ。もちろん、その直接的な理由としては、当時流行していた心境小説が題材の狭小性ゆえに必然的に閉塞状態に陥り、その状態を打破する要素として文壇の作家に「社会」への関心が要求されたことが指摘できる。しかし、より根本的な理由としては、円本ブームをはじめとする出版ジャーナリズムの成長を挙げなければならない。これが及ぼした影響は多方面に渡り、簡単には説明できないが、それが知識人や作家に及ぼした影響に限って論じると、出版ジャーナリズムという資本の論理が、文学や社会評論の執筆者に意識的、無意識的な危機感を与え、それに反応したのが「個」から「社会」へのシフトという形で表れたということをまずもって指摘すべきだろう。

自然主義文学を担った既成文学者は、文芸評論家でもあって、自らの作品を自らがその主題や社会的意味を語ることで創作の正当性を主張し、読者は作家に評論家を離れては文学作品を読むことができなかつたといつても過言ではなかつた。その意味で作家は「個」として特権化されていたというべき存在だつた。そこに、出版ジャーナリズムの成長を背景に雑誌の編集者などが介入しはじめた。彼等は文学作品の選択権を握ることでそれまで特権的地位を占めていた文学者に自己の作品から切り離されるようになり、作家は疎外されるという強い危機感をおぼえるようになったと思われる。このような危機感が、既成の文壇に小さな「個」に閉ざされていたことを反省させ、社会に眼を向ける小説を要求したのではないだろうか。

このような背景を考えると、なぜプロレタリア文学が個性に抑圧的だとか、芸術性に欠けるとかという批判を受けながらも大きな影響力をもったかが理解できる。要約的にいえば、プロレタリア文学は、社会主義的思想に基づいて社会を批判し、その前提の上に立って実現すべき「社会」を書き、それによって社会そのものの変革に寄与するところに自らの正当性を求めた文学であつて、それゆえにプロレタリア文学は「個」から「社会」へと進歩・進化した文学とみなされたの

であった。ここでも「モダン」の概念が高次の価値であったわけである。プロレタリア文学者が「モダンガール」に関して画一的な評価ながら発言する資格をもつのはこのような社会的認知から来るものである。

新しい時代の表現者を自負した作家たちにとって、「モダンガール」の登場は「個」から「社会」への移行を語る上で格好の素材を与え、そのような社会現象・風俗現象を解釈し正しい女性像を提示することは自らの正当性を主張することでもあった。その主張の根拠として「モダン」と結びつく「科学」を用いたことはいままでもないだろう。新感覚派の作家だった片岡鉄兵の『モダンガールの研究』（金星堂、昭和二年）はそのよい例として取り上げることができよう。

片岡鉄兵に対する文学史的評価は現在ではそれほど高くないが、同時代の批評などを参照すると同時代のジャーナリズムからは非常にもてはやされていたことがわかる。彼は登壇当初から、「若き読者に訴ふ」などの新感覚論を主張するかわら、主に女性雑誌に女性関係のエッセイや評論を多数書いているが、『モダンガールの研究』はそれをまとめたものである。さまざまな雑誌に自論を展開してきたものをまとめたせいも、反復する内容も多く、論じられている内容自体のレベルも精粗の差があるので、ここではその論旨を表してくれる「モダンガールの研究」の一篇を主に分析の対象にした

い。

片岡鉄兵は、青鞥社の「新しい女」を自然主義文学の産物とし、古い克服すべき対象とみなす。そして、この進化体として「モダンガール」を提示するという見方をとっている。彼はまず、自然主義文学の価値は、前近代的な宗教的迷信や因習に科学的態度をもつて反発し、美辞麗句に飾られた因習道徳を否定するところにあると限定する。したがって、大正初期に現れた「新しい女」は旧時代の『女大学』などの修身教科書が提示するような良妻賢母主義を否定し、因習道徳を破る存在として主張されるところに、自然主義文学の影響を片岡は認めているのだ。それゆえに彼は「青鞥社とは、この自然主義文学の盛なる頃に出現した『自覚せる婦人』の文壇的色彩を帯びた結社である」と結論づけている。しかし、片岡が「新しい女」を超えようとする意図を考えると、人間の本質は醜悪であるとする自然主義文学は彼が表現しようとする新しい時代の論理としてはもはやその存在価値を無くしているのとみているからだ。彼の観察する新しい時代とは、大正中期、すなわち第一世界大戦以後、資本主義経済が膨張し、それを支える機械文明が、すでに見たように、文化の面においても著しい変化をもたらした時代であり、女性の社会的地位に関しても女学生や職業婦人の急増や職種の多様化が目立った時代であった。このような時代を「新しい」と認識することによって片岡は、既成文学が「個」に執着したため

に閉塞状態に陥つたとし、それに代わる「社会」へ関心を向けることを要求する。そして、このような時代精神の具現体として「モダンガール」を評価し、このような論理を展開することで新しい時代の表現者としての自らの主張を行っている。

片岡の「モダンガール」論を具体的に分析する前に、まず指摘しなければならないのは、彼の主張する「モダンガール」は実際の「モダンガール」に関する議論などではなく、彼の意見を主張するために使われた、すなわち理想化された「モダンガール」であることはいうまでもなく、さらに、彼の主張が依拠している「科学」の言説も、今日の我々からは考えられないほどの擬似科学までをも含んだものだということをあらかじめ承知しておかなければならない。このような片岡の言説の特徴からしても、ここでは「モダン」の概念と関係している「科学」的言説のありようと、その関係を結びつけるためのレトリックの分析に絞って論じていきたい。

彼の主張する「モダンガール」を簡単に整理してみると次のようになる。すなわち、「モダンガール」は、教育と科学の産物であり、したがって本質的に現実的で理知的である。精神的なものより物質的なものが人間の心をとらえる物質文明の高潮期において、「モダンガール」は、この文明の具現者であるがゆえに、生活を科学的に合理化していきながら、感覚的享樂や肉体的刺激を追及する生活感覚を身に付けている。恋愛においても人間を悩ます心を求めないし、知的な好奇心をもって相手をよく観察し、自分に一番適合する男性を結婚相手として選択する。このような「モダンガール」は表現において自由であり、ヒステリーにならないから健康で明るい性格の持ち主である、というふうにとめられよう。

このような論理の行き着くところ、結婚は見合い結婚が適切であると主張するまでに至っているが、これも白樺派の恋愛思想や平塚らいてうによるエレン・ケイの翻訳などで広範囲の知識人から支持されていた、自由恋愛思想に対する新しい表現者としての自己主張をみることができるといえる。何よりも、「若き読者に訴ふ」において主体と対象を直接に結ぶ肉體性へと傾斜を見せていた文脈が「感覚」という語に現れていることを想起すると、片岡鉄兵の「モダンガール」論は彼の文学論の延長として述べられていることがわかる。

それでは、片岡鉄兵はどのような科学的言説を使ってこのような「モダンガール」論を主張したのか。その一例を引いてみよう。

一たん、貴女の意志によって結婚が結ばれた刹那に、永遠なる物への建設が意志されたのに違ひありません。もし貴

女が、無意識に盲目的に結婚されたのでなかったら、あなたの結婚生活に於るあらゆる感動は、永遠なるものへの望みの表れ、又は、夫婦相互の酸化作用に於る、人格創造への一の道程であつた筈です。(中略)

Aの妻、Aダッシュは、Aとの生活に於てのみ、生活建設の進行に円満であるやう、酸化されて居ると云ふことは、心理学的にも、また生理学的にも、よく認識されなければなりません。それ故、二人の人間が結婚するといふ事は、彼等の原形質から精神的動機に至るまで、つまり彼等の全身全心にとつて、運命的な決定であるとしなければなりません。

この文章は、夫と別れ愛人と暮らしたいという、ある夫人の手紙に対する答えという形式を取っているが、ここで述べられている「酸化」、「原形質」などの科学的用語は単なる比喩ではない。彼によれば、人間は「原形質」のレベルでは無機物の変化をも引き受けていると見るべきで、その進化の極限にある人間関係にあつても、その変化は等質であることを「酸化」と表現しているのだ。それは相手を納得させるために必要だったのである。このように彼は自分の論理の拠り所として科学的言説を多用する。男女の差異を説明するために生物学的、優生学的言説を用い、また「モダンガール」の朗らかで明るい性格と対比される旧婦人の鬱病やヒステリーを説明するためにフロイトの心理学を援用する。

それでは、なぜ片岡はこれほどの科学的言説を使ったのか、言い換えれば、そのような科学的言説を使うことによつて何を意図したのか。そこには新しい表現者としての自己正当化の手段として科学的言説に依拠したことは前述したとおりであるが、それではそのような科学的言説が意味したものは何か。結論からいうと、それは社会の進歩への期待だった。旧婦人の鬱病やヒステリーを克服した「モダンガール」の朗らかで明るい自由な存在、そして「モダンガール」からさらに進歩を成し遂げる未来の女性への期待、その背景としての機械文明のもたらす新たな社会の建設を期待していたのだ。片岡鉄兵は「モダンガールの研究」を次のような文章で終わらせている。「適者は不適者をこの世に於て征服していくのである。モダン・ガールとは未来の女性の暗示である。女性の完成への第一歩である。現代文化の歩調とリズムを合はせ、ハルモニイを共にして、美しく輝かしく、朗らかなる未来、次の時代の完成へと行進して行く彼女たちの音楽を聴け」と。ダーウィニズムを基調とするこのような社会進化論は、単に片岡鉄兵や一部の知識人が共有しただけの考え方はなかった。それは知識人の粹を超え一般大衆にも広く流通していたと思われる。

これまで「モダン」という用語で意味するものについて考察してきたが、もちろん、一般的な意味で「モダン」は、「流行の尖端に行く」の意として使われたことも見逃すべきではなからう。ジャズ、ダンスなどを「モダンあそび」と称した用例もあり、それからすると、西欧化、特にアメリカ化しつつある生活様式を指す形容詞であったとみて差し支えない。そして「モダンボーイ」、「モダンガール」などの言葉からもわかるように、「モダン」は軽薄な流行風俗を指す意味をも合わせもっていたことも確かである。しかし上述したように、「モダン」は科学技術の産物と合理性、進歩性を特徴とする科学の精神も意味していた。このように、稿者はここに時代の精神を代弁する文化現象をとらえることができると思う。「モダン」という言葉自体が、多様で多元的な意味合いをもっていることは、「モダンガール」をめぐる言説を複雑なものにしていることをけつして否定するものではないことをこわつておこう。

他者化される「モダンガール」

「モダンガール」という用語が広く注目を集めたのは、北沢秀一の「モダン・ガール」(『女性』大正一三年八月号)からである。北沢秀一は東京朝日新聞の記者を経て、イギリスに洋行し、帰国後は日活に入り宣伝部長などを務めるが、昭和二年急死した人物である。ここで確認しておくべきことは彼がジャーナリスト出身者だということである。彼の右の評論に関し、映画解説者、弁士を経て、俳優としても活躍した徳川夢声は、『証言私の昭和史』の中で、「これはねえ、ええ、大正一三(一九二四)年ごろでしたね。北沢秀一というね、長い間イギリスに行っていた文学者がおりましたね、これが当時の婦人雑誌に「モダン・ガール」という表題で書いたんですよ。非常に耳新しかったですなあ。これにはもちろんその、モガなんていう略した言葉はのつておりませんでした¹⁷⁾と回想している。

イギリスでの「モダンガール」論の紹介として語られている北沢の評論は、その内容に関して二つの点が注目される。一つは、「日本にもこんな意味に於けるモダン・ガールの群が存在するであらうか、さう聞かれた時、私は簡単に存在すると答へるのを躊躇する」といって、イギリスと日本の「モダンガール」の生態を同一視することに躊躇を示しているにもかかわらず、その後の知識人の中の「モダンガール」をめぐる議論をみると、北沢の「モダンガール」論が日本の「モダンガール」現象の評論に引き継がれているということであり、もう一つ、それよりも重要な点は、北沢の「モダン

「ガール」像が「民衆」の概念と結びつけて論じられていることである。

そして明治から大正に移る前後、新しき女や自覚したる女が沢山現はれた。これらの人々は今も尚存在し、極めて微温的ではあるが、その信ずる所を主張してゐるやうだ。然しこれらの人々は知識階級に於ける一部であり、或る意味に於ける特権階級に過ぎない。少くとも民衆的ではないと云ふ意味に於いて。(中略) 然し、私の云ふモダン・ガールは自覚もなければ意識もない。フェミニストの理想もなければ、サフラジエットの議論もない。彼等は唯だ人間として、欲するまゝに万事を振舞ふだけである。¹⁵⁾

「新しい女」とは周知のとおり、大正初期、雑誌『青鞥』などで活躍した、平塚らいてうをはじめとする女性解放運動家を指す名称である。「モダンガール」が流行語になってから、この「新しい女」との関係はしばしば論じられているが、北沢によれば、「新しい女」は「知識階級」に属する「一部」エリートであったのに対し、「モダンガール」は根本的に「民衆的」(「大衆的」と言い換えてもよからう)であるという。このような主張は後になると、知識人の間でよく見られるようになるが、この北沢の主張はその最も早いものとみてよい。

さらに、北沢は「モダンガール」の特徴として次のような点を挙げている。つまり、「新しい女」とも異なる「モダンガール」は、男女の平等をことさらに主張する必要もなくなった時代に現れたのだから、女性の権利をあえて主張するまでもなく、生まれながらにもつている。したがって、良妻賢母という旧時代の道徳にとらわれない「モダンガール」は伝統や因習から解放された存在である。古い伝統の美德であった、従順さやしとやかさの代わりに、「モダンガール」は物事をはつきりいう表現性と洗練さを得ている。それに精神的独立を可能にしてくれる経済的独立性をもっている。このような意味で自由な存在である。こうして、北沢はこの評論の最後で「かくの如くしてモダン・ガールは、恐ろしい勢ひで民衆の中から現はれて来る」と述べて結んでいる。

この評論が知識層の注目を集めた理由は、「モダンガール」が欧米で日本に先駆けて現れたという情報をもたらした点と、それが大衆のなから出現したという彼なりの分析にあったといえよう。欧米の思想の紹介や大衆の啓蒙と指導を主眼としていた知識人たちには何らかの形で「モダンガール」の出現が自分たちと関わる問題だと認識されたに違いない。

このような情報を背景に「モダンガール」を社会現象として定着させるのに大きく関わった新居格は、「近代女性の社会的考察」(『太陽』大正一五年九月号)において、日本における「モダンガール」出現の社会的基盤を「生活様式の欧米化」に求めている。彼によれば、「曾つて知識的に乃至概念的にのみ知解してゐた欧米文明を今日では生活乃至情緒のうちにまで細かく取容れて仕舞つた感じさへする」ということになり、ジャズなどの西洋音楽やスポーツ、活動映画を楽しみ、洋装をしてカフェーに出入りする女性が、いかに既成概念にとらわれず、平気で快活で自由であるかを論じている。つまり、西欧化しつつある「モダンガール」の出現がいかに反伝統的であり近代的であるかを主張しているのである。

この新居格の評論のなかで注目すべきことは、彼の問う近代性がこれまでの二節で論述してきた「近代科学」の精神によつて裏づけられていることである。このような認識に立つて新居は「モダンガール」の創造的側面を、「近代科学の觀念を以つて、科学の物を見る驚異のない平気でロマンチックの幻影をかぶせない態度を近代人である近代女性は感情化してもつてゐる」ところに見出し、このような「モダンガール」を「古い時代が新しい時代へ創造的進化をなしつつあるその無意識的先駆な」存在であると主張することになる。しかしその一方で、「モダンガール」の崩壊的側面をも見逃すことなく、「その主なる理由を滅び行くブルジョア末期の苦悶を乱舞と官能とに任」してるところに求めている。この崩壊的側面の主張は、「モダンガール」が流行に走る貞操觀念の乏しい女だ、という世の批判を受け入れ、それをマルクス主義的なテーゼに基づいて解釈したものといつてよからう。

ただここであらためて確認しておかなければならないことは、新居格のこの「モダンガール」論も、当然のことながら、実際の「モダンガール」についての説明などではなく、彼の主張する「モダンガール」であるということだ。それでは、なぜ新居は「モダンガール」の創造的側面と崩壊的側面を指摘しなければならなかったのか。これに答えるためには、新居格の時代認識とその中における知識人と大衆の關係を問わなければならない。

我々はこの国の社会現象を観察する場合、我々は実に多岐、多種、多様の形相を見る。極めて古い思想が極めて新しい思想とともにある。建設的な方図を指目する傾向と、崩壊に突進しようとする志向が共存する。欧米諸国で幾十年乃至幾世紀の間、歴史的な過程を取つて推移して来たあらゆる思想と感情とをこの国は殆ど同時性を持つて受容してゐる。¹⁹⁾

このような時代の認識にもうかがえるような「この国」と「欧米諸国」の間の差異を提示した後には、具体的な「社会現象」を、大正から昭和に移行する時期の日本における「思想と感情」に絞りこんで、新居は農村階級の崩壊やインテリゲンチヤの衰弱、資本主義の墮落などを時代の崩壊の側面とし、それに対して、ロシアの革命思想をも含む科学的思考を建設的、創造的側面として述べているのである。ここで知識人の役割が必要となる。彼が「モダンガール」を「新しい時代の無意識的な先駆」としてとらえているのは、そのためである。つまり、時代の建設的な先駆性をまだ自覚していない「モダンガール」は、そこから退廢的な傾向を切り離すことによって「正しい本物のモダンガール」になれる、そしてその役割を（意識的であれ、無意識的であれ）自らに課しているといふのである。

ここで注意しなければならないことは、このような主張のなかにはすでに「モダンガール」を他者化する認識の枠組みが見てとれるということである。前掲の北沢秀一の「モダンガール」論が、「モダンガール」とは大衆のなかから現れた精神的・経済的自由をもつ反伝統的な女性「である」ことだったのに対し、新居格の評論における「モダンガール」は、消費享楽性などのブルジョア末期社会の退廢的な傾向を取り除く「べき」存在として現れているのである。新居における「モダンガール」は、知識人の手によって教化されるべき大衆であり、その退廢的側面は彼女たちが模範としていたハリウッド映画などのアメリカ文化自体が退廢的なものによると認識されることで他者化されていることも容易に察知できよう。新居格とともに知識人の間で大きな影響力のあつたジャーナリストの大宅壮一は、「百パーセント・モガ」のなかで次のように述べている。

明るくて、朗らかで、感覺的で、理智的で、技巧的で、野性的で、複雑で、単純で、率直で―たしかに彼女は、典型的な「モダンガール」であろう。

だが、彼女は、真の意味の新時代の女たるべく、重大な要素を一つ欠いている。即ち、彼女のモダニズムは徹頭徹尾消費的で、生産的なところは少しもない。（中略）

そもそも最近流行のモダニズムそれ自体が一種の消費哲学である。最少の努力と費用をもって最大の刺激と享楽とをうるために発明されたものである。「能率第一」主義の消費生活における適用である。従来①の「モダン・ガール」とは、身を持ってそれを宣伝するところのマネキンの存在である。

この大宅壮一の「百パーセント・モガ」は、昭和三年の共産党弾圧事件（三・一五事件）の後に発表されたもので、これは当時のマルキシストによる「モダンガール」認識のありようを示してくれる。すなわち、マルキシストはアメリカの資本主義文化自体を刺激と享樂を助長する頹廢的な文化としてとらえ、それを享受する「現実のモダンガール」はマネキン的存在以外の何ものでもないと見ていたのだ。ここでは、断髪・洋装のもつ記号としての反逆性や反伝統性は認められず、「モダンガール」はもっぱら生産性のない、文化の頹廢を示すブルジョア社会の末期症状の典型的な現象として認識されたのである。

しかし、「モダンガール」が決定的に他者化され疎外に値する存在となってしまうのは、風俗現象として西洋かぶれの流行追従者の意味に、さらに社会道徳や法律に違反するという、いわゆる「不良」の意味が付け加えられてからである。つまり、「モダンガール」は不良少年と密会したり、外人と関係を結んだりする品行の悪いカフェーのウェイトレスなどを指す名称へと意味が移行していった。当時の多くの新聞記事が娼婦の取締りを、なぜか「モダンガール」に結びつけて記事にしているのは、その語の変質をうかがわせている。この理由を解明するためには、清沢洌の「モダンガール」論は少なからず示唆を与えてくれる。

清沢洌は明治三九年に渡米し、ホワイトハウス大学で政治経済学を専攻し、帰国後は「中外商業新報」「朝日新聞」「中央公論」などに勤めたジャーナリストである。「中外商業新報」記者の時代中国大陸の東北地方に特派され、そこでの経験は特に彼の評論「ハルピンの女」（『モダンガール』金星堂、大正一五年）に反映されている。しかし昭和四年、朝日新聞記者として大杉栄の虐殺事件をファシズム批判の観点から論じた「甘粕と大杉の対話」という記事を執筆したが、それが右翼からの激しい反発を受け、朝日新聞を退社している。そのようななかで、彼は国際的なリベラリストの識見をもつて主にアメリカとの外交問題や女性の地位向上の問題に関して多くの評論を発表している。「モダンガール」についても『モダンガール』（金星堂、大正一五年）をはじめとする多くの雑誌記事を書いているが、ここでは「モダンガールの解剖」「女性」（昭和二年一二月）を取り上げたい。

まず、清沢洌の女性観を踏まえておく必要がある。それには『モダンガール』の序文で自らの言及で次のように述べていることが参考になる。序文は対話形式で展開されているが、そのなかで注目されるのが次の清沢自身の主張だろう。

君はよく婦人の解放を叫ぶけれども、そんなことは男である君の口から聞きたくないよ。昔から資本家が自分から進んで労働者を解放したことがあるかね、征服者が自分の方から被圧民族を解放した歴史があるかね。真剣の運動は、いつでも下敷きになってゐる当の本人から出るのが常道だし、またそれでなければ、実際上の効果はないんだ。日本婦人が、あきらめの上に安住して、それで満足してゐる時に、側から種々云ふのは却つて罪悪だよ。苦しんでゐるとすれば、それはわれ等ではなくて女性なのだから、解放の必要があれば、彼ら自ら叫びだす。

ここからはマルクス主義ないし社会主義の政治意識を読み取ることができ、「新しい女」の思想的な系譜に「モダンガール」を位置づけようとしていることも指摘できるが、それよりも当時の男専制社会に立ち向かう女性として「モダンガール」を見ていることが重要であろう。

もちろん、このような女性観は「モダンガールの解剖」の内容においても一貫している。そのなかで、清沢冽は日本社会における「モダンガール」の議論が「不良」のイメージと結びつけられることで、排撃されるに価する存在になつてしまつた理由を次のように説明している。

モダン・ガールと然らざるものゝ區別は、日本的か西洋的かという点に帰するやうだ。そしてこの區別からいふと操行上の問題などは少しも含まれてゐないといふ方が正確である。男だつて洋服を着る者が不品行で、日本服を着る者は品行がいゝなどとはいはない。婦人だけが何故洋服を着るもの、或は西洋風に着飾るものが『不良』で、日本流なのは善良なのか。婦人の道徳といふものが、袂の中や帯の間にはさまつてゐるものではあるまいし、それだけで道徳問題まで決めてしまはれては、幾ら優しいのが女の特性でも、黙つてはゐられなからう。

清沢冽によれば、「モダンガール」が「不良」として認識されるそもその理由は、「実際のモダンガール」の行動などとは関係なく、洋服を着ること、あるいは西洋風に着飾ること自体にすでに潜在していることを暴露している。そしてそれとともに、西洋文化の摂取においても男女間に差別をもうけるまなざしがあることに注意を向けている。そこに男性優

位社会における女性への蔑視と西欧文化への警戒感を見てとることは容易だし、その文脈の延長上に女性が映画や雑誌などを通して直接西洋文化に触れ、そのファッションを取り入れること自体がある種の脅威感を与え、それが男性のまなざしを色濃く反映するマス・メディアの煽情性と結びつくことによって「不良」のイメージが烙印されたという文脈が導きだされてこよう。

「モダンガール」を「不良」と結びつけるこのような男性の視線は行政当局を含む支配勢力の考え方と一致するものでもあった。内務省で映画検閲を担当していた橋高広という官僚は次のように述べている。

日本のモダンガールは外国のフラッパーの意で、頭はオカッパ、スカート短く、口紅つけて、眼の廻りにクマを取り、タバコをふかし、男のお友達、一人又は大勢と談笑する、反身になって、足を投げ出して、椅子にかけて居ると云った外形描写をして居る、大地震後の産物で、所謂新しい女ではない、洋装はして居ても、ラウメイキングの手際や、男とジャラつく所はゲイシャガールと同一だ、但し職業的ではない、つまり洋装とフラッパーがモダンガールを特徴づけ、オフィスガールとウェイトレスが其等を代表して居る。

治安を担当する官僚のまなざしからすると、「モダンガール」はもはや娼婦の意味でしかない。たとえば、「フラッパー」とはアメリカの小説家、スコット・フィッツジェラルドによつて流行した言葉で、伝統的な既成概念にとらわれないお転婆娘を指すくらいの意味で使われた言葉であり、それが多少の性的ニュアンスを含んだ言葉だったとしても、引用に見られるような娼婦同然の意味を表す言葉ではなかった。「新しい女」と区別される「モダンガール」の表象として論じられてきたものがすべて反道徳の烙印を押され、それらがこれまで知識階級に対する大衆、女性解放運動家に対する大衆消費社会における消費者などといった新たな文化的意味をもつと価値づけられていたが、官僚のまなざしにはまったく表れていない。「モダンガール」に対処するような治安担当者の認識は、当然のことながら、婦人犯罪のカテゴリーで考えられ、「モダンガール」は取締りの対象になってしまふ。「警視庁不良少年係」という肩書きで書かれた新聞記事などを見ると、カフェやダンスホールを性犯罪の温床とし、ウェイトレスやダンサーなどの「モダンガール」がいかに性を商品化しているかを露悪的に伝えている。このようにして「モダンガール」は社会の周辺部まで追いつめられることによって完

全に他者化されてしまったのだ。

本論は主に大正末期から昭和初期にかけての新聞の記事や雑誌の評論などに見られる「モダンガール」をめぐる言説について考察してみた。ここで結論めいたことをいえば、それは多様なレベルで「モダンガール」が他者化されていくプロセスであったということができよう。すなわち、当初、近代精神を表す女性の登場としてはややされた段階から、服装・髪型・化粧といった外貌の誇張が目立つ風俗現象に目が注がれるようになるとともに、進歩的精神性を欠いた西洋かぶれの流行奴隷、そしてやがては、娼婦として論じられていくといったプロセスがたどられた。そのプロセスにおいて、いかに知識人と大衆の間の関係、西洋化の過程における男女間のずれ、風俗を取り締まる国家権力側のまなざしなどが絡み合って「モダンガール」の言説が形成されたかを明らかにした。

注

- (1) バーバラ・ハミル・佐藤「モダンガールの登場と知識人」『歴史評論』丹波書林。(一九九一年三月号)、一八一—二六頁。
- (2) ミリアム・シルババーク「日本の女給はブルースを歌った」『ジェンダーの日本史』下巻、東京大学出版会(一九九五年)、五八七頁。また、ミツヨ・ワダ・マルシアーノは、同じ箇所を引用しながら、程度の差こそあれ、「女給」も「モダンガール」と同じく、イデオロギー的な構成概念であるという指摘をしている。(松竹蒲田映画における女性映画の創造——「人生のお荷物」(一九三五)分析)『映像学』(第61号、一九九八年)、七二頁。
- (3) 今和次郎『モデルノロジオ考現学』学陽書房(一九三〇年、一九八六年復刻版)、二四頁。
- (4) 鈴木文史朗「モダン・ガールと普選」『女性』プラトン社、昭和二年三月号。
- (5) 永嶺重敏の『モダン都市の読書空間』日本エディタースクール出版部(二〇〇一年)、三—七頁参照。新聞雑誌などの活字メディアの急成長の一例を挙げると、『内務省統計報告』によるものとして、大正一年から昭和四年の間、新聞雑誌発行数(タイトル数)が三二七件から九一九一件まで伸びていることが確認できる。特に、円本ブームが起った大正末期から昭和初期にかけての急増が目立つ。
- (6) 『近代生活座談会』『文芸春秋』文芸春秋社、昭和三年一月号。
- (7) 平塚らいてう「かくあるべきモダンガール」『平塚らいてう著作集3』大月書店(一九八三年)、二九六頁。
- (8) バーバラ・ハミル・佐藤、二〇頁。
- (9) 「一謳歌すべきモダン諸相」／「二排撃すべきモダン諸相」『モダン日本』文芸春秋社、創刊号(一九三〇年)。

- (10) 龍胆寺雄「モダンアニズム文学論」『新文学研究』金星堂、昭和六年四月号
- (11) 大宅壮一は、「片岡君の文学的というよりもジャーナリストイックな地位は、新時代の菊池寛といった感じである。新潮社の『長編小説全集』をはじめ、たいいてい全集において、第一回配本に選ばれているのは、菊池寛のものである。ちょうどそれと同じように、片岡君は平凡社の『新進傑作全集』その他において、いつもトップを切っている。『文学時代』一〇月号の「短編二十五人集」にあっても、まず第一に片岡君の「恥辱」からはじまっている」と記している（『片岡鉄兵の作品』「新潮」、昭和四年一月月号）。
- (12) 片岡鉄兵「モダンガールの研究」『モダンガールの研究』金星堂（昭和二年）、六頁
- (13) 一八九八（明治三二）年の女学校生徒数は、全国で八千人だったのが、二〇世紀に入ってから急増を見せ、一九一八（大正七）年一〇万人に達したことを機に一気に増えはじめ、一九二八（昭和三）年には三〇万を超えている。職業婦人の数も、第一次世界大戦以後急増しているが、その数よりは女性がつく職業の多様化が当時から問題にされた。教員や看護婦などの従来の特を越えて、大正末期には、タイピスト、電話交換手、オフィスガール、女店員をはじめ、バスガールやデパートガールなどカタクナにつく職業が多数現れた。当時の女性雑誌は競って職業婦人特集を組んでいるほどの関心を集めたのである（唐沢富太郎『女子学生の歴史』木耳社、一九七九年）。
- (14) 片岡鉄兵、九四―九五頁
- (15) 片岡鉄兵、四一頁
- (16) ささきふさ「モダン遊びの相手」『女性』プラトン社、大正一五年三月号
- (17) 東京12チャンネル報道部編「モボ・モガから日の丸弁当まで――流行語昭和史（戦前）――」『証言私の昭和史1』学芸書林（一九六九年）
- (18) 北沢秀一「モダン・ガール」『女性』プラトン社、大正一三年八月号
- (19) 新居格「近代女性の社会的考察」『太陽』博文館、大正一四年九月号
- (20) 大宅壮一「百パーセント・モガ」鈴木貞美編『モダン都市文学2――モダンガールの誘惑』平凡社（一九八九年）、三九八―三九九頁
- (21) 読売新聞からいくつかの例を挙げてみると、「不良外人掃蕩の幕開き」一九二七（昭和二）年五月七日、「浅草でモガ検挙」一九二七（昭和二）年一〇月三日、「モガに魅入られ文学士謎の家出」一九二八（昭和三）年五月二九日、「夏の盛り場を中心にモガ、モボの一斉狩り」一九二九（昭和四）年五月三日
- (22) 清沢冽「モダンガール」金星堂（大正一五年）、二頁
- (23) 清沢冽「モダンガールの解部」『女性』プラトン社、昭和二年二月月号
- (24) 橋高広「アメリカ映画と『モガ』」『現代娯楽の表裏』大東出版社昭和三年刊の複製『余暇・娯楽研究基礎文献集9』大空社（一九八九年）、八六頁